SHORT ESSAY

「ある後悔」

菊池佐紀

Saki Kikuchi

きくち・さき　文芸同人誌「アミーゴ」主宰。県生涯学習推進講師。平成13年度、県文化協会主催「文化活動推進フォーラム」でパネリストをつとめる。テーマは、「美しい日本語の復活に期待」北条市在住。

小学校一、二年までの私は腺病質の、人前でロクに口も利けない内気な子供だった。

道後駅の近辺に、子供相手の一銭商いの駄菓子屋があり、愛想のいい婆さんが店番していて、結構、繁盛していた。

ある日、混み合ったその店で、いつも見かける女の子と一緒になった。私と同い年位のその子は、掌に握っていた銅貨を婆さんに差し出し、目当ての菓子の名を言った。掌の平に十銭玉が乗っているのを私はチラ、と見ていた。

昭和十二年頃のその当時、一銭で飴玉が二つ貰え、十銭も出すと大きな紙袋一杯の駄菓子が買えた。それなのに婆さんは、私があれ?と訝るほどの量の菓子しか女の子に渡さなかった。おとなしく帰って行った女の子は、ほどなく昂った顔の女の人に腕を脱けるほど引っ張られながら戻ってきた。帰りかけていた私の前で、二人の声高な押し問答が始まった。

普段は優しげな人相の婆さんの目がきりきりっ、と釣り上がって、いいえ、十銭ぢゃございません。あれは一銭でござんした、と頑強に突っぱねている。十銭渡したはずだと女の人も詰寄ったが、結局、女の人が負けて、子供の体を手荒く曳きずりながら店を出て行った。

その女の人は見かけは上品でも、この界隈では「継子いじめ」で名が通っているのを私も知っていたはずなのに、婆さんのもの凄い見幕におそれをなして、口を挟む勇気がどうしても出なかった。

家に帰ってからも、十銭だと思ったのは見誤りで、一銭だったのだ、そう考えることで自分の意気地なしをカバーしようとした。が、あれは十銭だった、という確信の方がはるかに強かった。いつも顔色の冴えないあの子が今頃どんな仕置をされているか、私の気持ちは滅入った。

かわいそうな境遇の子を見殺しにしてしまったことが後ろめたく、その後転居して行った女の子の顔が、私の心の襞に住みついて今もはなれない。